

機関番号：32658

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820041

研究課題名（和文） ライティング教授法とその効果：ジャンル・アプローチ

研究課題名（英文） Developing a writing pedagogy: Genre approach

研究代表者

保田 幸子 (YASUDA Sachiko)

東京農業大学・農学部・助教

研究者番号：60386703

研究成果の概要（和文）:

ジャンル・アプローチを取り入れた1年間のライティング授業で、学習者のライティング能力および言語能力がどう変化するかについて縦断的に調査した。本研究におけるジャンル・アプローチとは選択体系機能言語学に基づくもので、社会的コンテキストに応じた構成やスタイル、語彙や語形に対する認識を高めながら書く力を育成することを目指す。縦断的に収集したデータを分析した結果、学習者のレトリカル認識には大きな変化が見られ、またその認識の変化が学習者が産出する文章の変化にも反映されていることが分かった。

研究成果の概要（英文）:

This study examines how novice foreign language writers develop their writing competence and linguistic knowledge in a one-year genre-based writing course. To define genre approach, this study draws on systemic functional linguistic (SFL) theory that sees language as a resource for making meaning in a particular context of use. Analysis of the longitudinal data revealed that the novice writers made progress in their rhetorical awareness, and that changes in their awareness were apparent in their actual written products.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	590,000	177,000	767,000
2010年度	440,000	132,000	572,000
総計	1,030,000	309,000	1,339,000

研究分野：第二言語ライティング

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：英語，ライティング，ジャンル，アカデミック・リテラシー

1. 研究開始当初の背景

ジャンルアプローチは読み手やタスクの目的によってテキストの特徴がどう変わるかを明示的に指導することにより、社会的コンテキストに適した構成とスタイル、語彙や語形を選択できる力を育成することを目指す。

す。ジャンル・アプローチの教育効果については、これまで米国の大学のESL教育現場を中心に報告がなされてきているが、日本などEFLコンテキストからの成果報告はほとんどなされてきていない。また、EFLライティング研究では、特定の教授法にどのような効果

が見られたか、長期的に学習者のピルーフやライティング能力がどの程度伸びたかなど「教授法の長期的効果」に関する実証的研究もほとんど行われてきていない。先行研究におけるこうした背景が本研究の着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究を実施するにあたり以下の3つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

(1) 日本人大学生は、ライティングコース開始時に、「外国語で書くこと」や「ジャンル」に対してどのようなピルーフを持っているか。

(2) 日本人大学生の「外国語で書くこと」や「ジャンル」に対するピルーフは、ジャンル・アプローチに基づくライティング指導を受けた後でどのように変化したか。

(3) 日本人大学生の「書く力」はジャンル・アプローチに基づくライティング指導を受けた後でどのように変化したか。

3. 研究の方法

本研究は、都内私立理系大学の必修英語コース(前期+後期=30 weeks)で実施された。研究参加者は、本コースを履修する大学二年生(N=70)である。研究代表者は本授業を担当する教員である。収集したデータは、(1) 授業で学習者が産出した文章、(2) アンケート、(3) カンファレンスにおける学習者のリフレクティブ・コメントの3つである。学習者の変化を追跡するため、一年のコースのうち、前期開始時、前期終了時、後期開始時、後期終了時の4度に渡り縦断的にデータを収集した。

次に、ジャンル・アプローチに基づくライティング指導の概要について述べる。まずコースの目的は次の3つである。(1) 前期終了時に「メール文」が書けるようになる(2) 後期終了時に「要約文」が書けるようになる。(3) 「ジャンルと社会的コンテキスト(読み手や目的)の関係」及び「ジャンルを形成する語彙やスタイルの違い」について高いレトリック認識(rhetorical awareness)を育てる。(1)(2)(3)の目標に向けて、授業では様々なモデル文をIdeational(内容面)、Interpersonal(読み手と書き手の関係)、Textual(構成面)の観点から分析し、書く目的や読み手が変わることによって語彙やスタイルがどのように変化するかについての意識

を育てることを重視した。モデル分析の後のライティング・タスクでは、読み手は誰か、また書く目的は何かを必ず明確に伝えるようにした。

4. 研究成果

リサーチ・クエスチョン別に結果について以下に報告する。

(1) 日本人大学生は、ライティングコース開始時に、「外国語で書くこと」や「ジャンル」に対してどんなピルーフを持っているか。

コース開始時に実施したアンケート結果から明らかになったことは次の通りである。本研究に参加した学習者(N=70)は、ほぼ全員が過去に「メール文」や「要約文」についての明示的な指導を受けたことがなく、またそれぞれのジャンルを書いた経験もほとんどないことが判明した(これは英語に限らず日本語の文章経験についても同様である)。また、「あなたが考える良いメールとは? 良い要約文とは?」に対する回答としては、「へりくだる」「分かりやすい」(メール)、「まとまっている」「だらだら書かない」(要約)など、漠然としたものが多く、ジャンルに対するピルーフは明確なものが構築されていないことがうかがえた。これは、アンケートでも明らかになったように、学習者の過去の作文経験に起因するものであることが考えられる。

(2) 日本人大学生の「外国語で書くこと」や「ジャンル」に対するピルーフは、ジャンル・アプローチに基づくライティング指導を受けた後でどのように変化したか。

ジャンル・アプローチに基づくライティング指導を受けた後で(1)と同様の質問(「あなたが考える良いメールとは? 良い要約とは?」)したところ、学習者から得られた回答に変化が見られた。例えば、良いメールに関しては、「読み手が誰かを考え、それに合った語彙を選ぶ」、「目的をきちんと達成するための最も適切な表現を使う」、「読み手の立場になって必要な情報やその構成について考える」など、学習者の中に「読み手」や「目的」に対する意識が育っていることが明らかになった。同様に、良い要約に関しては、「読み手の情報量によって簡潔に書くか詳しく書くかを調節する」などのコメントが多く見られた。さらに、要約に関しては、「剽窃(plagiarism)を避けるために自分の言葉で言い換える」、「自分の意見と著者の意見を区

別するために伝達動詞(reporting verbs)を用いる」など、要約の基本ルールに関する知識が獲得されたことを示すコメントも見られた。

(3) 日本人大学生の「書く力」はジャンル・アプローチに基づく指導を受けた後でどのように変化したか。

上記(2)で述べた学習者のジャンル意識の変化は、彼らが実際に産出した文章の中にも反映されていた。メール文では、タスクの正確さ(task appropriacy)、構成(organization)、文法(grammar control)、流暢さ(fluency)、語彙の豊富さ(lexical diversity)の5変数について授業開始時と授業終了時のメール文を比較したところ、全ての変数において伸びが見られた。また MANOVA 検定を実施したところ、そのうち 2 時点の間に有意な差が見られた。特に顕著な伸びが見られたのはタスクの正確さであったが、それは、学習者が与えられたコンテキストに応じた最も適切な語彙を選択できるようになったことが理由として考えられる(例えば、"Please do..." の代わりに "I'd appreciate it if you could do..." や "I was wondering if you could do..." という丁寧な表現を使えるようになった)。

学習者の文章の変化は、後期に実施した要約文においても観察された。要約総合的評価(holistic score)、流暢さ(fluency)、文の複雑さ(syntactic complexity)、パラフレーズ率(paraphrased clauses)、文法的比喩(grammar metaphor)の5変数について授業開始時と授業終了時の要約文を比較したところ、全ての変数で伸びが見られた。また、MANOVA 検定を実施したところ、そのうち 2 時点の間に有意な差が見られた。特に顕著な伸びが見られたのは文法的比喩であった。文法的比喩は、節を名詞化することで完成する表現であるが(Because technology is getting better, people are able to write business programs faster. Advances in technology is speeding up the writing of business programs,)、これは情報を簡潔に集約することが求められる要約文で重要な役割を果たす言語要素であることが多くの先行研究で報告されている(e.g., Drury, 1991; Halliday & Matthiessen, 2004; Hood, 2003)。授業開始時には、原文で使用されている表現をそのままコピーし剽窃と判断される可能性の高い文章が多く見られたが(パラフレーズ率は約 50%)、授業終了時には、この文法的比喩を使用することによって、パラフレー

ズ率が約 90%にまで上昇した。この結果は、文法的比喩を効果的に使えるようになることが要約文の総合的な質を高める可能性が高いことを示唆している。

次に注目しなければならない結果は、二時点で有意な差が見られなかった変数に関してである。メール文では語彙の豊富さ(lexical diversity)、要約文では文章の複雑さ(syntactic complexity)において有意な差が見られなかった。この結果が示唆することとして次の二点が考えられる。一点目は、15週間という期間が、全体的な語彙量を有意に増やしたり、また複雑な文章を産出する力を獲得するには十分ではない可能性が高いということである。そして、二点目は、全体的な語彙量や文の複雑さは、文章の質に影響を与える変数とは言えない可能性があるということである。

この二点目の考察は、「ライティング能力」と「言語能力」の関係を考える上で極めて重要である。上で述べたように、メール文の質に特に顕著に影響を与えていた変数は、コンテキストに応じた語彙やスタイル(I'd appreciate it if you could...など)を選択できる力であった。同様に、要約文の質に特に顕著に影響を与えていた変数は、情報の集約化に貢献する文法的比喩を使える力であった。これらの結果を総合的に考察すると、「ライティング能力」と「言語能力」の関係について次の結論を導きだすことができる。

ライティング能力に影響を与える要因は、どれだけ多くの語彙を知っているか(how many words writers know)という量的なものよりも、どれだけコンテキストに合った語彙を適切に使えるか(how contextually meaningful words writers use)という質的なものである。従って、「ライティング能力」を伸ばすために必要な「言語能力」とは、語彙量というよりはむしろ、コンテキストに応じた最も適切な語彙を引き出せる力のことを意味する。

この力を育成するためには、ライティング授業でジャンルを取り入れることが重要となる。メール文や要約文のように、文章は、書く目的、また読み手の違いによって使用される語彙が変化するためである。

日本の大学における英作文授業では、論証文(argumentative essays)や意見文(opinion essays)などのいわゆる "school-sponsored genres" (Leki, 1997)が扱われることが多い。しかし、これらの school-sponsored genres のみに特化しては、書くことの指導において最も重視されるべき「レトリック認識(rhetorical awareness)」が育たない可能性がある。なぜなら、意見文や論証文の読み手は主に「教員」であり、書く場面は主に「教

室」内であり，読み手や目的に応じて語彙を使い分けるという ”language as meaning-making system” (Martin, 2009) が実感しにくいからである．こうした英作文授業の状況を考えると，読み手や書く場面や書く目的を教室外のより広い社会的コンテクストに設定した「ジャンル・アプローチ」は，日本人大学生のレトリック認識を育て，英語ライティング能力の基盤を構築するきっかけになることが期待される．

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Yasuda, Sachiko (2011). Genre-based tasks in foreign language writing: Developing writers' genre awareness, linguistic knowledge, and writing competence. *Journal of Second Language Writing* (査読有) 20, 111-133.

Yasuda, Sachiko (2010). Learning phrasal verbs through conceptual metaphors: A case of Japanese EFL learners. *TESOL Quarterly* (査読有) 44, 250-273

[学会発表](計2件)

Yasuda, Sachiko. EFL writers' genre awareness and language development: A systemic functional approach to email writing. American Association of Applied Linguistics (AAAL). In Chicago, IL, USA, March 26-29, 2011.

Yasuda, Sachiko. Effects of genre tasks on EFL writing development. Japan Association of Applied Linguistics (JALT). Nagoya, Japan, November 19-21, 2010.

6．研究組織

(1)研究代表者

保田 幸子 (YASUDA Sachiko)
東京農業大学・農学部・助教
研究者番号：60386703

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無